

土木工学・建築学委員会感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市の

あり方分科会（第25期・第8回）

議事要旨

I. 会議名 土木工学・建築学委員会感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市のあり方分科会（第25期・第8回）

II. 日時 令和4年8月31日（水）15:00～17:00

III. 会場 遠隔会議

IV. 配付資料

資料8-0：（議事次第）土木工学・建築学委員会感染症委第8回

資料8-1：第25期感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市のあり方分科会（第7回）議事要旨

資料8-2：SWG1 アンケート案 20220831

資料8-3：ITC 基盤提言 202209

資料8-4：シンポジウム企画書_感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市のあり方分科会 02

資料8-5：SWG25 感染症見解案メモ

資料8-6：20220831（矢守）コロナ禍_境界なき災害のマネジメント

資料8-7：見解素案 20220831

資料8-8：防災分野からみた話題（高橋）

IV. 議題等

0-1. 議事要旨の確認

第7回議事要旨（資料8-1）について確認された。

0-2. 分科会の出口（見解等）について

竹内分科会長より、感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市の再考分科会見解素案（資料8-7）について紹介された。委員から出された意見は以下の通り。

- 「かつ災害に強く」を「かつ災害や感染症に強く」に修正

- 「人口縮小社会における問題解決のための検討委員会」という別委員会があり、9/2 シンポジウムと、その延長で提言を想定されているとのことで、重複しそうである。ハードや空間の話など、本分科会としての独自性を出すべき。
- 「移動の減少によるエネルギー消費の削減」が削減のみか？表現に注意。
- 項目 1 の内容は、日本固有の課題か？国際的な課題か？

0-3. 委員による話題提供

高橋委員より、資料 8-8 に基づき、防災分野からみた COVID-19 の影響等に関する話題提供がなされた。地域コミュニティ単位での交通について議論が活発になされているが、高速道路・新幹線のような幹の公共交通に与える影響が紹介されるとともに、経営状況の差異が安全性に影響することを危惧し、公共交通を担う民間会社への国の関わり方に関する事例が紹介された。また、流域治水について、従来の総合治水との違いやその効果について紹介された。直接 COVID-19 と係わる話題ではないが、ポストコロナにおける地域計画の話と関わるという意見があった。

1. 各 SWG の活動報告（各 SWG 幹事）

- WG1 から、海外の研究者に対するアンケートを実施したが、ポスト・コロナの働き方について、資料 8-2 に基づき、国内外企業（建設系）向けにアンケート調査を実施したい、との提案があり、承認された。
- WG2+5 より、資料 8-5 に基づき、見解に記載すべき内容、目次に関する議論の状況が紹介された。機能主義から機能混在へという流れはあったものの、制度がそのようになっていなかったところもあり、それがコロナで緊急的に解除されて可能性が見えてきたという面もある、との意見が出された。
- WG6 から、本日の矢守先生による話題提供を踏まえ、より防災・情報に関する知見の収集を図りたいと報告された。

2. 公開シンポジウムの内容について（斎尾委員）

WG2+5 より、資料 8-4 に基づき公開シンポジウムの実施が提案された。

- タイトル：感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市のあり方～機能主義的社会から機能混在社会へ～（仮）」
- 日時候補として 12/18, 1/21, 22, 29 が提案され、本日参加委員の日程より、12/18, 1/21 午後, 22 が候補日に絞り込まれた。
- 第一部は実空間において起こりつつある機能混在社会の実態について、第二部は今後の機能混在社会において実空間とバーチャル空間をつないでいく情報のあり方について考える。
- 二部の話題提供は外部講師を呼ぶのではなく、分科会メンバーで構成したい。話

題提供者として、三輪律江委員、山本加世子委員、高橋良和委員が提案され、了解された。

2. 話題提供：「コロナ禍：境界なき災害のマネジメント」

(矢守克也先生（京都大学防災研究所）)

- 高橋委員より、矢守先生の経歴が紹介された。
- 「アフターコロナ／ビフォーX」に関し、コロナ禍で実現可能となった対策（三密対策、分散避難など）の多くは、「もともと（ビフォー・コロナ）」において大切であったことであり、従来声を枯らして呼びかけても実現しなかったことが、気づいたら改善していたということは、無意識の革命ともいえる。ある事象X（今回はコロナ）が発生すれば、気づいたら改善できるようなこと（Y）は、実はビフォーXの段階で、改善にむけて既に十分に機が熟している。このようなXとYの組を見出すことが、コロナに学ぶということではないか。
- コロナ禍は、空間（ゾーニング）、時間（フェージング）、役割（ポジショニング）の3つの境界を無効化したのではないかと。そして、その予兆は東日本大震災でもあったように思う。
- コロナ禍では、感染対策か社会経済活動かの二者択一が議論されることが多いが、南海トラフ地震の臨時情報やスーパー台風の接近では、事前情報か日常生活継続かの二者択一が議論となる。一方、従来声を枯らして避難指示を呼びかけても機能しなかったものが、鉄道が計画運休するだけで簡単に解決した事例もある。社会的スローダウンとそのモニタリングがキーワードとなる。

講演後、下記のような意見交換がなされた。

- 防災などの基本原則ゾーニングが機能しなくなってきた。グレーゾーンを科学的だと思ってもらうには？グレーゾーンに対する人々と専門家とのコミュニケーションのあり方について、経験などから何か知見はないか？
- コンセンサスの境界が曖昧になってきている。制御の仕方は世界中で模索中。コロナ自粛に関する論文（未発表）において、自粛というマネジメントのあり方について論考している。日本社会は自粛というマネジメントからそう簡単に脱却できそうにない。逃れられないのであれば、それをエレガントに変えていきたい。そのためにもモニタリングとフィードバックシステムは有効であると思う。
- ポジショニングの無効化について。コロナでは医療従事者に大きな負担がかかっている。役割が集中してしまっているのではないかと。医療従事者に集中するのは、規制があるから？ポジショニングを無効化させるべきである、と言い換えるべきだろうか。

3. その他

- 次回、10月4日15時より。シンポジウム最終版を詰めるとともに、見解の議論を深める。

(文責：高橋)